

潮来市の誇れる文化 第147回

方言・訛りも貴重な文化財

方言や訛りに分類されるのかは判断に迷いますが、地名の発音は漢字表記があるので、地元の方の発音との乖離が良く解ります。例えば旧牛堀地区に「上戸」があります。地元の方の発音では「わど」と聞こえますが、公的には「うわど」と発音させているようです。さらに「堀之内」の発音が「ほんのじ」「川尾」は「かお」ですが、わずかに訛りが加わっています。これを漢字の通りに発音すると地元では逆に通じないこともあるので、この表現は文化といつて良いのではないのでしょうか。写真は太生古墳群の中の石碑（「古墳子子前塚」と書いてある）です。しかし、この古墳は多くの文献では「子子舞塚」と表記されています。因みに読み方は「まごまごづか」または「まごまいづか」となるようですが、地元の方は「まごめづか」と言っているように聞こえるので、この混同もあって二つの表記が見られるのかも知れません。つまり訛りが表記に影響した、そのような解釈も許せるとすれば、方言や訛りは、文字化は難しいですが充分に尊重し、残しておくべき無形の文化財かと思えます。

潮来市も移住者が多くなり、また若い方がいわゆる標準語を使うようになり、この文化が消えようとしています。これは文字や録音で残しても、口頭使用が続けなければ微妙な訛りや絶妙な使い方が伝わりません。皆さん、誇りと自信を持って、潮来地方の方言や訛りを積極的に使って伝え続けていかなくてはいいでしょうか。

もはや死語になっている「さるこ」（五・六月頃の早朝に稲葉先端に着く水玉）、「えつつい」（太陽が眩しく輝く状況の表現）などは復活してもまだ使える言葉かと思えます。今ならまだ間に合います。古老から学び、そして伝えていきたいものです。



潮来市文化財保護審議会委員 久保 隆

潮来市の誇れる自然 第87回

水郷の魚たち ―スゴモロコ

北浦湖岸での投網体験教室（写真1）や調査では、小型コイ科魚類のスゴモロコ（写真2）がよく採れるようになってきました。この魚の特徴は体が細長く、口がやや下向きで、1対の口ひげがあること、体色が銀白色で、生時、体側に黒斑がちらちらすることなどです。以前から北浦に流入する巴川の下流域では生息が確認されていましたが、なぜかここ数年、北浦本湖や巴川以外の流入河川でも増えつつあるようです。

スゴモロコはもともと琵琶湖固有の淡水魚です。琵琶湖では魚食性外来魚による捕食や環境変化などの影響で減少傾向にあり、環境省版レッドリストで絶滅危惧種に選定されています。一方で、琵琶湖産アユの放流用種苗に混じって放流され、各地で国内由来の外来種（Ⅱ国内外来種）として定着しています。霞ヶ浦では1990年にはじ

めて確認され、近年は桜川など一部の大きな流入河川の下流域で優占するほど多くなり、その動向が注視されています。

本種の生態については、琵琶湖では満1年で全長5・8cm、満2年で9・11cmになること、5・7月に産卵すること、雑食性で小動物や動物プランクトン、植物質などを食べることがわかっていく程度です。冬になると霞ヶ浦では沖の深場によく採れますが、これは越冬時に深場へ移動する琵琶湖での習性とも合致します。いずれにしても、琵琶湖で減ったのに、なぜ北浦や周辺水域で増えつつあるのかは不明で、当研究室の学生たち（卒業生を含む）が侵入先の霞ヶ浦・北浦での生態・生活史を調べているところです。

茨城大学地球・地域環境共創機構
水圏環境フィールドステーション
加納光樹・加藤卓太



(写真1) 北浦湖岸での投網体験教室



(写真2) 北浦で採れたスゴモロコ (加藤撮影)